

事態把握の違いを利用した語学教材の提案

佐野洋^{†1}

概要: 言語が違うとものごと(事態)の把握や認識の仕方も違う。本稿では、事態の把握の仕方の違いに着目した語学教材の提案を行う。第一のポイントは、母語(日本語)の事態把握の仕方を意識させることにある。無意識の意識化によってターゲット言語(英語)との違いが明瞭になるので、学習効果を見込める。第二のポイントは事態を時空間表現で表すことで、視覚的な理解や把握を通じて学習ができる点である。テキストや音声メディアだけでなく、画像を使うことで複合したメディアを通じた学習に適する。とくに視覚情報を使うことからアナロジー能力を発揮し易いと仮定できる。なお効果の検証は今後の課題である。

キーワード: 事態把握, 語学教材, 日英語対照, 帰納学習

A Proposal for Language Teaching Materials based on the Manners of Thinking and Perceiving Events

SANO, Hiroshi^{†1}

Abstract: This paper proposes a language teaching materials for English learners based on the manners of thinking and perceiving events. The materials are designed to provide learners with cognitive intuitions and views of their native language, and promote appropriate and proper understanding of English. Discussions in the paper on the impact of perception of what events are demonstrate how it can be useful in learner-centered learning environment.

Keywords: Perceiving Events, Language Teaching Materials, Contrastive Linguistics, Inductive Learning

1. はじめに

1.1 ことばの学習

人材育成機関としての大学に対し、グローバル人材育成の機能の強化が求められている。2013年に発表された教育再生実行会議の第三次提言(a)では、「大学のグローバル化の遅れは危機的状況にある」との指摘の下「グローバル化に対応した教育環境づくり」の推進、同時に「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育を充実する」ことが表明されている。文部科学省でも、国際競争力の向上を目的に、スーパーグローバル大学創成支援事業を展開している(b)。

多くの大学でグローバル人材育成を目指した様々な取り組みが進められている。語学教育に限っても教育枠組みの変更も含めた留学機会の確保と推進などの施策がとられているほか、実用的で実的な言語運用能力の育成のため英語による授業が実施されている。

周知のように中学・高校と6年間の英語教育が行われ、さらに1990年代以降には会話重視の教育課程が導入され

た。しかしながら1995年から14年連続で高校入学時の英語学力が低下しているという[1]。英語力向上につながらない原因も様々に考察されているが、基本的な分析視点としては、言語間距離の遠さであろう[2]。アメリカ人にとって日本語やアラビア語が習得困難言語であるとされる(c)。逆もまたでは決していないが、日本語母語話者にとって共通点の多い朝鮮語や、漢字を文字に使う中国語に比べると英語は習得が困難と感じる言語だろう。

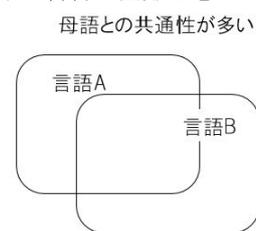


図1 北西ヨーロッパ言語連合等



図2 バルカン言語連合等

[2]が指摘するように、語学教育に欧米で直接教授法が普及しているのは、同じ語属する言語であれば文法や語彙の共通性が大きいことから母語の能力を活用できるからである(図1, 図2(d))。

^{†1} 東京外国語大学 言語文化学部/大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

a https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaizei/pdf/dai3_1.pdf

b http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1319596.htm

c https://en.wikibooks.org/wiki/Wikibooks:Language_Learning_Difficulty_for_English_Speakers

d 北西ヨーロッパ言語連合(英語、フランス語、オランダ語、ドイツ語等)。バルカン言語連合(ブルガリア語、マケドニア語、ルーマニア語、アルバニア語等)。例えば、英語と中国語は、英語が屈折語から孤立語的に変化しているので、文法関係を語順で示す点は類似している。但し、語彙は共通性がほとんどない。一般的に、文法については、・同系であるか、・伝播の程度、・類型論的類似性が類似性に関係する。語彙については、・同系であるか、・借用の有無や程度、・擬声語が類似性に関係する

さらに文法や語彙に共通性があまりない言語（図 3）をターゲット言語として学習するには、「文法訳読法でしっかりと基盤を養う」ことの重要性を指摘している [2]. 学習ターゲットの言語システム（文法や語彙の成り立ち）について正確な理解が必要である.

母語との共通性があまりない

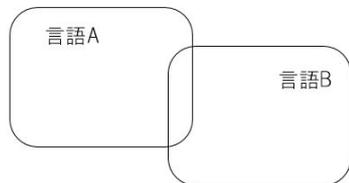


図 3 英語と日本語, アラビア語

本稿では, ターゲット言語の文法や語彙の説明に加えて, 無意識に使用している母語の仕組みを明示的に対比させることが適切な理解につながると主張する. 延いて

は習得時間の短縮も可能であると考えている. とりわけ認知水準が発達している学習者層（高校生後半や大学生以上の年齢層）には高い有効性があるだろう.

1.2 学習の効率化

ものごとが急進展し, 急展開する現代社会では, いかなる分野もその領域の考え方の吸収を促進するための学習の効率化が求められている. 当然, 語学学習にも効率化の手立てが必要である.

一般に語学学習においては, 記憶負担の占める割合が大きいことは確かであり事実でもある. しかしながら, 文法や語法といった学習領域では, 学習対象の言語と母語の仕組みの違いを明示することで対象言語の仕組みの理解や解釈速度が早まり, 且つ的確に対象言語の枠組みを記憶する（産出に結び付ける）ことができると考える. その結果, 受容・産出双方で誤用を減らし, 無駄な学習の繰り返しを減らすことができるだろう. トライ&エラーによる技能獲得ではなく, 納得する技能獲得（理想はエラーレスの学習）を目指したい.

1.3 語学教材と学習手段

近年, 能動学習を充実させる取り組みが盛んである. 講義を中心とする受け身の教育だけでなく, 学習者が主体的・協働的に学ぶ学習が提唱され, そして推進されている (6 頁, [3]). 能動的に学ぶ観点からも母語の仕組みの気付きを利用する方法は, 対象言語の知識を活用できるかたちに変えられる可能性がある.

一般的な語学教材は, 演繹推論の能力の活用を前提にしている. 文型とその解釈規則を教授する. 語形を示しその意味を伝える. 前件の照合によって後件の解釈を活性化するのだ. この能力活用の仕方は, 全く新しい概念や観念の学習, およそ母語の語彙と音形も語形も関係がない語彙の習得には, 不可欠な手段である.

これに対し, 帰納推論の能力を活用する語学学習もある. 多くの表現事例を特徴的なキーワードやパターンで集め, その類似性を観察し, 自ら考えて, その特徴を見いだしたり一般化したりする手段である ([4]).

イメージを活用する教材もまた多い. 発話のコンテキストを明示することで, 言語表現の運用の仕方について使用環境を意識して学習するものである. 従来の『1. 空港で』なども, 使用環境を想起させる語彙をタイトルとして利用したイメージ活用の教材だ. 句動詞や前置詞の学習教材では直裁に具体的なイメージを提示する事例がある. 視覚イメージによる直感的な把握ができる. ただし, イメージ教材だけで英文法全体の理解をカバーするものは無い. またイラストに工夫がなく, リアル過ぎる, また違いに焦点をあてていないなどの問題点がある. 説明対象語彙を列挙し, イラストを添付するだけに止まっている場合もある ([5]).

1.4 無意識の意識化

本稿が提案する語学教材の提示方法は, 事態把握の仕方の違いに着目して, 母語を強く意識させ帰納推論能力を使う学習方法の一つである. 無意識の意識化によって考える際にアナロジー能力を発揮させることがポイントとなる. 従来, 学習対象言語の意味なりパターンなりが説明対象であった. 本稿の提案は, 対応する母語の仕組みも含めて説明を施す. 学習領域が英語領域の領域知識だけでなく日本語領域の領域知識も含まれるのである. 母語に関する知識なので, 学ぶ必要ではなく気付くことの重要さなのである.

分かり易さのために多様なメディアの利用が不可欠である. そのためにはコンピュータを利活用することが必須であろう. 本来的に, 生き物は, 身体行為と受容器官により外界からの情報を得て, 外界とのコンタクトを繰り返すことで学習している. 学習にも複合メディアを積極的に利用すべきである. ただし, すべての情報を同等インパクトで提供するのはいくつか. 違いを明確にすることが求められる. そのため映像よりもイラスト, さらにそのイラストも学習ポイントが焦点化されたものがよい.

1.5 give と「与える」

2 節で述べるが, 英語の動詞は表現規模が大きいことが特徴である. 例えば give の近似的な訳は「あげきる」である. "I gave him a birthday present."では, 誕生日を祝う贈り物が彼に届ききっている. "I gave a birthday present to him."だと誕生日を祝う贈り物を与えおえたことを表す. 相手 (him) に届いていない可能性がある. 目的語の位置交代と前置詞 (to/for) の選択といったことではない.

また, drown は「溺れ死ぬ」という意味なので継続表現 (ing 形) がない. drowning では「溺死, 水死」(名詞) で

(これら言語間距離は, 本学・箕浦信勝准教授から解説を頂いた).

ある。後述するが一貫して動作や行為の取りかかり部分を表す日本語の用言と違う。但し、常に行為・動作が完了する部分まで表現するわけではない。動詞の意味によって違う。

例えば、shoot の近似的な訳は「射貫く、射貫いてしまう」だから、矢を射る際に、的が物陰に隠れたとすると「必然的に射貫けない」から、表現の大きさを小さくするために "shoot at" (狙う) を使う。

従来から、上記のような語法・用法上の解釈のヒントやコツは幾つも取り上げられてきたが、いずれの散発的である。例えば、パラグラフ・ライティングであれば、議論の枠組み(議論のロジック)であり、二重目的語構文なら、動作・行為の完了性や完成性として説明され、句動詞なら辞典に一覧として列挙される。個々の語彙に関わることは辞書内の注記として記述されているといった具合である [6] [7] [8]。

本稿では、これら散発的に取り上げられてきた教材内容のことを事態の把握を基礎として一般化する。日本語の事態把握と英語の事態把握の違いを捉え直す。そのために時空間イメージ図が重要な理解メディアになる。

2. 事態とその把握

2.1 事態

人が感覚情報を通じて知覚したモノやコト、そして想像して創り出したモノやコトを表象と呼ぶ。さらにモノやコトの関係性を1つの出来事として認識したのもも表象と呼ぶ (84 頁: [6])。本稿では、こうした表象のうち出来事の関係性を表す基本的なコトを事態と呼んでいる。

日本語ではモノを体言と呼び、コトを用言と呼ぶ。英語では、モノを名詞と呼び、コトを動詞と呼ぶ。同じモノやコトに日英語で異なる呼び名が与えられているのは、感情表現やコミュニケーション、思考表現を行うために創り出したことばの文法機能上の働きが随分違うためであって、機能把握や理解のための概念範囲が異なるからである。

知覚されたり認識されたりしたモノとコトとはどのような意味なのか、さらに関係性を認識するとはどういうことを意味しているのかを示す。

2.2 事態の把握の仕方

実際のところ事柄を把握する仕組みは脳内の活動の結果なのでハッキリは分からない。脳神経科学の発展は目覚ましいようだが、脳神経科学の専門家でない我々にできることは、仕組みがこうであろうという仮説を立て、その仮説に従って(言語化された)事態を説明する仕組みを述べることになる。本節では、その仮説を説明する。

筆者は、ことばの多様な仕組みを生み出している事態を把握する仕組みの違いを、因果関係理解の方略の違いに求

めた [7]。因果関係理解が出来ることはヒト科(ヒト, チンパンジー, ゴリラ, オラウータン)に共通である。そのうちヒト(我々)は、外界の物理的な状態推移に関係性を見いだす能力があることが特徴だと指摘されている (65 頁: [6])。この関係性を見いだすことがポイントである。

この世の中、空間内に実在しているのはモノだけである。モノは空間内で位置を占めていて、一般に性質や属性に応じて名称が与えられている(体言や名詞)。モノは時空間内で位置が変化する。この位置変化に特徴を見だし、2 状態(以上)のモノ変化を関連づけて、ある間隔で区切りを付けて、その関係性を想像し(考え)、他と区別できるような名称を与えたものがコト(出来事)である(用言、動詞)。

従って、すべてのコト(用言、動詞)の意味は、実在ではなく想像(あるいは認識や取り決め)の産物である。実際に視覚による知覚は案外いい加減であることが指摘されている。視覚は、本当に何らかの現象が起こった場合と起こっていない場合の区別がつきにくく、いろいろな現象を感じ取る最適な手段といえないという (50 頁: [8])。

この想像(認識、取り決め)をした関係性(考慮対象となるモノの数、変化の程度(空間形状)、変化までの間隔(時間)など)が、いわゆるコトの意味と考えられる。モノとコトの意味は、モノの名付け(性質や属性の認め方)と、コトの名付け(変化の解釈)に現れる。さらにモノとコト使って事態や状況を説明するから、言語の仕組みの違いとして現れる。

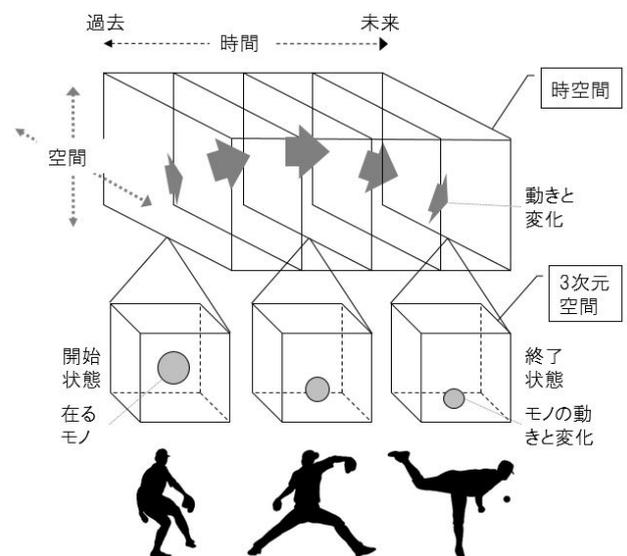


図 4 「投げる」コトの時空間

例えば、「昨日野球の試合で投手がボールを投げた」という事態(出来事)がどのように認識されるかを図で確認してみる。なお、時空間は3次元空間の連続体である。図では3つの3次元空間を代表して書いているが、本来は、この3次元空間が数え切れないくらいある (235 頁: [9])。

「投げる」という動作・行為が成立する(関係として認められる)には、次のような要素が必要だ(図 4)。

- 「投げる」という動作・行為遂行に必要な時空間（有限な長さの3次元空間の連続体）。
- 「投げる」という動作・行為遂行に必要な状態変化（開始状態（3次元空間）と終了状態（3次元空間）、及びその差（モノの位置や形状の変化状態））。
- 「投げる」という動作・行為遂行に必要な状態変化に関与するモノ（投げ手、ボール、腕（手段）、地上の領域など）。

この他、「昨日野球の試合で投手がボールを投げた」背景には、「投げる」行為をするに至った目的や目的を遂行する手段（ここでは投手の腕）、そして動作・行為の予測される結果や話し手（書き手）の動作・行為に対する気持ち（視点や評価）があると考えられる。

どのような想像によって、名付け「投げる」があるのか、あるいは、*throw, deliver* が作られたのか。筆者の仮説は、「コトについて、日本語は用言の意味を「計画した出来事」として表すことを選好する。動作・行為の背後に目的があると想定はするが、意図的であることを保留し、他者（行為に関わる者）の心を理解しようとする（目論み）。英語は、動詞の意味を「目的のある出来事」として表すことを選好する。動作・行為の背後に目的があると想定し、他者（行為に関わる者）がその目的を意図的に為しきる（為し得る）と考えようとする。」である [7] [10]。

2.3 日英語の事態把握の違い

日本語は、時空間規模が小さい、モノの状態が変化することは分かっているが、取り掛かり部分だけの意味を用言に持たせていると考えている。それに対して英語は、時空間規模が大きい、モノの状態が十分変化することを含む意味を動詞に持たせている。ここで「空間規模が大きい」のは時間長が長いことをいう。また同じ時間長であれば、空間の大きさが大きいことをいう。「時空間規模が小さい」ことは時間長が短いことを示している。同様に同じ時間長であれば、空間の大きさが小さいことをいう（時空間形状については分からない。本稿では単純に立方体図形を使っている。形状の分析は、今後の検討課題である）。

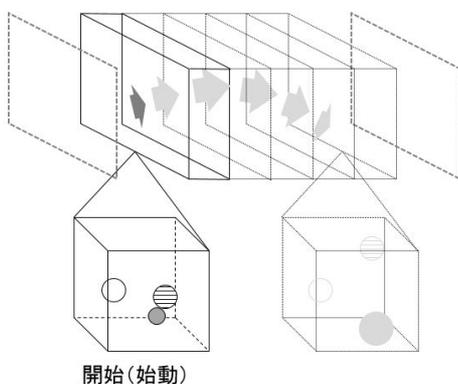


図 5 日本語の事態の時空間規模

日本語は、時空間規模が小さいので、動作・行為の開始

部分（始動相）だけを意味し、超時間的な性格が強くなる（状態表現に近づく、ナル型言語）。時間間隔が短いので、動作・行為は点的な扱いを受け、完了か未完了かの区別をする。複数のコトがある際に、それらコトが生起する順序は努めて気にするが、時間軸上に配置することはしない（相対時制の言語）。

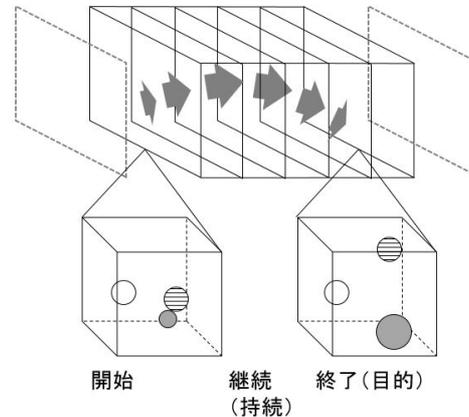


図 6 英語の事態の時空間規模

それに対して英語は、空間規模が大きいので、動作・行為が目的達成に至るまで（過程）を意味する。動作・行為は（時間経過を意識する）過程の意味を持ち、さらにそれらが直線状の時間軸に配置されると捉え、現在時点があると想像し、過去と未来の区別をする（絶対時制の言語）。

なお、動作・行為の目的状態はコトの想像に依存して様々であるから、動詞がいつも動作・行為が完了する時点まで表現する訳ではない（語彙依存のアスペクトを持つ、スル型言語）。

この捉え方から必然的にモノの捉え方が決まる（詳細については稿を改める予定）。「モノについて、日本語は空間表現の二次元化が進み、体言の意味を関係物（機能や役割）として考えようとする。英語は、空間表現が四次元化されるので名詞の意味を存在物（具体物や有界物）として考えようとする。」である。

さらに、進めて演繹的に分かることは、日本語の用言の意味は、（表意文字（漢字）を使用していることもあって、）その意味に関わる体言の意味（機能や役割）と強く結びついていて、用言の意味に曖昧性があまりない（動詞フレーム言語）。ですから、文における格要素の表出が必須でもないし、所謂格要素の格助詞が脱落することさえある（「私ご飯食べます。」）。格要素などの非顕在化によって、一般化が安易に進むので、コトの意味は一般化の傾向が強くなる（類（class）や型（type）の意味を表しやすくなる。語用論型言語）。

同様にして英語の動詞の意味は、その意味に関わる名詞の意味（存在）との結びつきが弱く、動詞の意味に曖昧性がある（衛星フレーム言語）。ですから動作・行為を具体的に表すには、名詞の位置づけ（格関係）を決める必要がある。言語類型的には、英語は孤立語傾向が強いこともあり、

主語や目的語、補語の表層実現が必須である（主語の義務化、統語論型言語）。従ってコトの意味は具体化の傾向が強くなる（インスタンスの意味を表しやすくなる。準動詞や不定詞句は類や型の意味を表すための道具である）。

そうすると、さらに日本語の体言には形態変化がなくて役割語が多いことや、英語には複数形や不定冠詞を含めた形態変化があることなども、モノに対する考え方の違いの帰結として理解できる。

3. 事態の表現

コトとモノを解釈する仕組みの仮説を説明した上で、事態を表現する仕組みを示す。

事態を表現する主体者は、話し手（書き手）である。日本語では計画された出来事として表現されるので、認識対象の目論みを表現する（認識対象を「が」で表現する）。認識対象が行為者であるとき、動作・行為の初動だけを表現する（動詞述語）。認識対象が対象物であるとき関係状態を表現する（形容詞述語、名詞述語）。

ある事態や出来事に在るモノの存在は、役割や機能についての話し手（書き手）と聞き手（読み手）の間の知識の共有度（や共感度）の強さに依存するので、共有するモノの導入を行う主題化形式（「は」などの係助詞）が発達している。導入されたモノは形容詞や連体修飾によって限定され具体化される。

一方、英語では目的のある出来事として表現されるので、行為主体の動作・行為を表現する。行為主体の意図性（と力）が時空間の大きさを決める。文法の枠組みとして孤立語傾向が強い制限から主語の表出が必須である。そのため主語位置に行う主体以外のモノを出現させることになる。この場合には、動作・行為表現になりにくいので状態性や関係性の表現が現れる（自動詞、関係表現の動詞（be, relate, depend 等）、受動形表現）。

ある事態や出来事に在るモノの存在は、話し手（認知主体）の認識前提なしに外置されていて、存在するモノの導入を行う存在化形式（不定冠詞、複数形、前置する形容詞）が発達している。導入されたモノは関係節によって限定され具体化される。

主体者の事柄に対する心持ちはモダリティとして現れる。日本語は領域概念を用いた侵蝕/非侵蝕や領域相互の移動の概念、対象に対する共感度によって表現を行う。英語は出来事蓋然性と出来事の生起への関わりの程度（力）を使って表現を行う。

時間の表現について、日本語は時空間規模が小さく時間間隔が短いので、動作・行為は点的な扱いを受け、テンスは完了か未完了かの区別をする。複数のコトが生起する順序に厳格である。それに対して英語は、空間規模が大きいため、時間が経過する過程を表現する。さらにそれらが直線状の時間軸に配置されると捉え、現在時点があると想像

し、過去と未来の区別をする。

認知属性に対応する日英の文法用語（表層属性）は、それぞれ次のように纏まる。

表 1

認知属性	日本語文法用語 (表層属性)	英語文法用語 (表層属性)
コト	用言	動詞
モノ	体言	名詞
動作主, 受け手, 対象	助詞付要素 (が成分, を成分, に成分, で成分)	主語, 目的語, 補語
目的, 手段, 時刻, 場所	助詞付要素 (に成分, へ成分, と成分, で成分, より成分, から成分)	補語, 前置詞句
テンポラリティ	相対時制 (完了, 未完了)	絶対時制 (点的時間 (現在, 過去, 未来) と連続時間)
アスペクチュアリティ	タ形, テイル形, テイタ形または複合動詞で表現する。	動詞の意味に内在するが, 前置詞や句動詞でも表現する。
モダリティ	自領域・共領域・他領域かどうかで表す。	出来事の蓋然性と行為・動作実現への力の強さを主に助動詞で表す。

日英語の出来事の捉え方の違いは、次のようになる。

表 2

	日本語の認識 (認知傾向)	英語の認識 (認知傾向)
モノ	関係 (機能, 役割) を表す (超時間) 傾向	存在を表す (実時間) 傾向
モノの有り様	超時間的 (三次元的)	時空間的 (四次元的)
コト	一時点の状態を表す (超時間)	一連の動作・行為を表す (実時間)
コトの有様	結果状態を表現する (推論指向)	過程を表現する (目的指向)
モノとコトで作る方法	助詞を用いる: モノは機能や役割を表現する。モノの位置づけを明示する程度が弱い (所謂格表示機能が未発達。格助詞の省略や要素が非明示となる)。	語順と前置詞を用いる: モノは他と区別できる存在として表現される。動作・行為内における個々のモノの位置づけを明示する程度が強い (格表示機能が発達)。
モノの修飾	体言の性質を関係性を使って詳細に説明	名詞を分類したり, 詳細に性質を説明し

	する.	たりすることで明確に具体化する.
モノの修飾を文法化する方法	連体修飾(形態上の制限が厳しく連用修飾と区別される)	形容詞, 関係節, 前置詞句(形態であったり位置関係であったり, 形態上の制限が緩やか)
モノの修飾方法	モノの位置づけを明示する必然性が弱い(関係性の割り当てに推論を含む)ので外の関係性を許容する.	モノの位置づけを明示する必要があるから所謂内の関係しか許容できない.

日英語における事態の把握の違いを示した。本稿で示したように日英語の違いは、事態に対応させている時空間規模の認め方の違いが基本にある。そうして、この考え方に基づいて、上表に示したように、文法特徴が演繹されるのである。

4. 教材例(イメージ図)

本節では、事態の把握の違い(時空間を用いた因果関係の把握の仕方の違い)に基づいた考え方を使い、教材サンプル(時空間イメージ)図を作成したので、それらを示す。

なお、表1と表2に示した、本稿で示したアプローチから演繹的に導出される文法属性の特徴については以下のサンプル図には反映していない。時空間内のモノの表現は、事態を示す上で不可欠であるが、モノの把握の仕方と同様に稿を改め、その中で示したい。

4.1 jump と leap

jump : <人・動物が>(すばやく脚・尾を用いて)跳ぶ, 跳躍する, 飛びはねる) (e)

leap : 跳ぶ (jump より堅い語)

日本語の「跳ぶ」は、基本的に左端の一つの時空間図が対応する(「跳ぼうとする」: 始動相表現)。

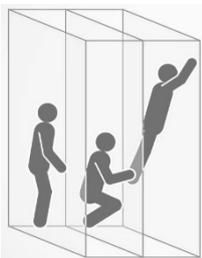


図 7 jump

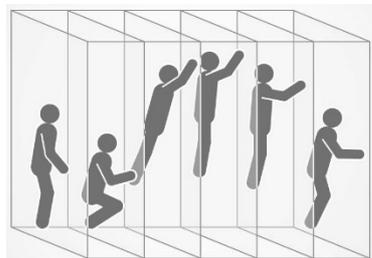


図 8 leap

図8のように leap を着地するまでのイメージ図にするのは描き過ぎかもしれない。しかしながら、日本語の「跳ぶ」はいずれにしても左端の一つの時空間図だけであるこ

e 日本語訳は「ジーニアス英和大辞典」(電子版 EX-word DATAPLUS7 搭載)を用いた。1に掲載の表現を載せた。本節以後の用例についても同様

とを強調することができるほか、jump と leap を使い分けると感覚を養うことができる。

4.2 blow と blow out

blow : <風が>吹く, うなる, ヒューヒュー音をたてる

blow out : <タイヤなどが>パンクする

4の意味として「<火などが>風[息]で消える」が掲載されている。

日本語の「吹く」は、基本的に左端の二つの時空間図が対応する(「吹き始める」: 始動相表現)。

本例は、動詞と句動詞の例である。4.1節の例と同様に時空間の大きさが変化していることを示している。

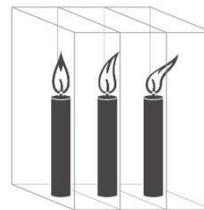


図 9 blow

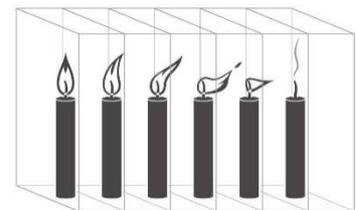


図 10 blow out

上記の図では、訳「<タイヤなどが>パンクする」に対応できていない。イメージ図の工夫が必要である。“blow out”を他動詞であるとすればよいだろう。なお、目には見えない「風」の類象物として何をイメージに選択するのも今後検討したい。

4.3 write

write : 書く/手紙を書く

2に、二重目的語構文の文型を示して「書き送る」の訳を掲載している。

“write a letter to someone”のイメージ図を図11に示す。

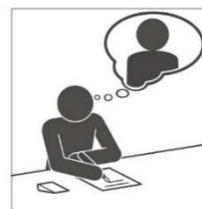


図 11 “write a letter (to someone)”

“write someone a letter”のイメージ図を図12に示す。

である。



図 12 “write someone a letter”

本例は、二重目的語構文の例である。4.1 節や 4.2 節の例と同様に時空間の大きさが変化していることを示している。但し、日本語の「書く」に対応するイメージ図を正しく表現できていない。「書こう」とする状態から「何かを書いている」状態を連続した時空間図で示すことを検討したい(もう少し抽象化した時空間図形の提案)。

5. おわりに

本稿では、事態の把握の仕方の違いに着目した語学教材の提案を行った。第一のポイントは、母語(日本語)の事態把握の仕方を意識させることにある。無意識の意識化によってターゲット言語(英語)との違いが明瞭になるので、学習効果を見込める。第二のポイントは事態を時空間表現で表すことで、視覚的な理解や把握を通じて学習ができる点である。テキストや音声メディアだけでなく、画像を使うことで複合したメディアを通じた学習に適する。とくに視覚情報を使うことからアナロジー能力を発揮し易いと仮定できる。なお効果の検証は今後の課題である。

なお、もっか「開く」「開ける」、「落ちる」「落とす」などの自他の対応を説明するイメージ図の作成、ならびに受動や使役のイメージ図の検討を始めている。また、本稿で示したアプローチから演繹的に導出される文法属性についてはサンプル図に反映していない。時空間の形状の分析と併せて今後、イメージ図を充実させていきたい。時空間内のモノの表現についても同様である。

日本は、語学教材とりわけ英語教材の供給の点では充実した学習環境にある。巷には語学教材が溢れ、様々な語学教育サービスを見つけ出すことができる。これに加えて留学や海外在住の経験者の増加によって学習者は豊富な語学知識を持つようになってきている。にもかかわらず、日本全体を対象とする学習者集団としては、[1]の指摘にあるように芳しくない。言語学習における効果的で効率的な教材内容の工夫が今後とも必要である。

謝辞

本研究は、科学研究助成(基盤研究(A))、「大規模会話コーパスに基づくラーニングマイニングの深化とテラーメイド日本語教育」(研究代表者:芝野耕司)の支援を受けている。

本研究は、「日本語マニュアルの会」(代表者:横井俊夫)の議論を基にしている。

参考文献

- [1] 大津由起雄 江利川春雄 斎藤兆史 鶴飼玖美子, 英語教育、迫り来る破綻, ひつじ書房, 2013.
- [2] 成田一, “日本の英語教育の原点—「英語で授業」から文法訳読への回帰—,” Japio YEAR BOOK 2014, Japio, 2014.
- [3] ベネッセ教育総合研究所, “アクティブであるべきは誰か?,” VIEW21, 第 10 月, 2015.
- [4] 若松弘子 石井卓巳 中條清美, “学習支援用日英パラレルコーパス SCoRE の構築における課題—日本語対訳原文の訳出に焦点を当てて,” 英語コーパス研究第 22 号, 英語コーパス学会, 2015.
- [5] 田中茂範 cocone, 英語の発想と基本語力をイメージで身につける本, コスモビア株式会社, 2011.
- [6] 東信行 諏訪部仁訳編, 研究者 - ロングマン 句動詞英和辞典, 研究社, 1994.
- [7] 田中実, 英語構文ニュアンス事典, 北星堂書店, 1988.
- [8] 石橋幸太郎 伊藤健三 高梨健吉 鳥居次好 広瀬泰三 渡辺藤一, 英語語法事典, 大修館書店, 1964.
- [9] ペーテル・ヤーデンフォッシュ著 井上逸兵訳, ヒトはいかにして知恵者となったのか 思考の進化論, 研究社, 2005.
- [10] 佐野洋, “目的と目論み、存在と関係,” アジア太平洋機械翻訳協会, AAMT ジャーナル, No.59, 2015.
- [11] マーク・チャンギー著 中山宥訳, 〈脳と文明〉の暗号 言語・音楽・サルからヒトへ, 講談社, 2013.
- [12] デイヴィット・ドイッチェ著 林一訳, 世界の究極理論は存在するか 多宇宙論から見た生命、進化、時間, 朝日新聞社, 1999.
- [13] 佐野洋, “事柄の表現方法の違い 目論みと目的視点でみた日本語と英語の対照,” TC 協会, 2015.